

## 富山・東木津遺跡

ひがしきづ



(石動・富山)

- 1 所在地 富山県高岡市木津・佐野
- 2 調査期間 一九九九年（平11）六月～八月
- 3 発掘機関 高岡市教育委員会
- 4 調査担当者 荒井 隆
- 5 遺跡の種類 集落跡・官衙跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

東木津遺跡は、高岡市中心部、小矢部川と庄川に挟まれた、標高約一一〇～一二〇mの微高地に位置する。本遺跡周辺は、往古の庄川が形成した扇状地の末端部にあたる。

本遺跡は、弥生時代後期から奈良・平安時代を中心とする遺跡で、検出された遺構の大部分は奈良・平安時代のものである。過去の調査では、掘立柱建物一七棟、護岸施設のある自然流

路一条などが確認されている。遺跡はこの自然流路SD一〇五を中心広がり、SD二〇五の左右に掘立柱建物群が主軸を南東～北西方向にとり、規格性をもつて配置されている。また、遺跡の東側から北側にかけては低湿地帯となっている。

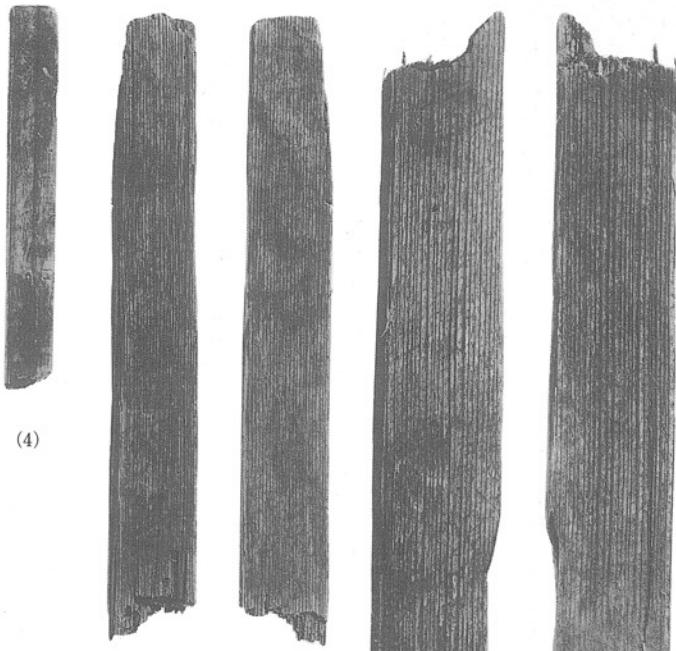
本遺跡からは、一九九八年度の都市計画道路の建設に伴う調査（都市計画道路地区）で、木簡がSD二〇五から八点、低湿地帯から一点それぞれ出土している（本誌第二二号）。

今回の調査は、資材置場の造成に伴う試掘調査（堀井地区）であり、発掘面積は二七〇m<sup>2</sup>である。当調査地区は、遺跡の北東端部にあたり、溝二条と自然地形の落ち込みを確認した。この自然地形の落ち込みは、前述した低湿地帯の一部分に相当し、ここから木簡五点が出土した。伴出遺物として、八世紀後半から九世紀前半の須恵器・土師器、人形・鳥形・馬形・舟形・琴柱形・刀子形・斎串・横櫛・針・曲物・火鑽板・火鑽杵・物差・箸などの木製品、墨書き土器、古墳時代前期の赤彩土師器などがある。墨書き土器は一点で、須恵器杯蓋のつまみ上面に「下」と記している。

### 8 木簡の釈文・内容

- (1) □□□□□□□〔郡カ〕

□一月六日便

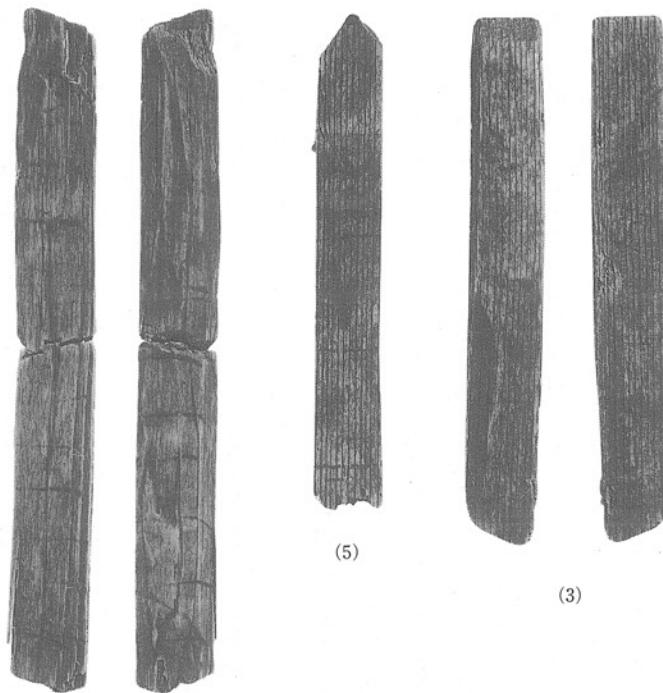


(4)

(2)

(1)

(142)×(20)×11 081



(5)

(3)

(66)  $\times$  8  $\times$  7 019

(参考 物差)

(1)は上端部が欠損している。「二月」の上に文字があり、「年」あるいは「十」であろうと推測する。「便」の意味については不明である。(2)は下端が欠損し、側面は割れている。「百束」は量として非常に多い。(3)は上部に面取りをし、両側面は割られている。下半部は二次的に削られている。「十」の上の文字は「申」あるいは「中」であろうかと思われる。(4)は両側面が二次的に削られ、下半部は欠損しているため、木簡の原形は不明である。(5)は横材の木簡である。針などの先端の鋭いもので、幅約2cmの刻界を木目と直交する方向に刻む。木目から見て上・左右側面を二次的に削り、下端は欠損している。

伴出した物差は、間隔にばらつきがあるが、両面に約五分(一・五cm)間隔で目盛りを墨書する。

墨痕が濃く遺存している木簡の多くは、細分され文章の全体が把握できない。意図的に木簡を細分して廃棄したと推測できる。

なお木簡の釈読は、奈良国立文化財研究所の館野和己氏・渡辺晃宏氏・山下信一郎氏・吉川聰氏による。

## 9 関係文献

荒井 隆『市内遺跡調査概報X』(高岡市埋蔵文化財調査概報四二  
一〇〇〇年)  
(荒井 隆・岡田一広)

## 富山・手洗野赤浦遺跡

1 所在地	富山県高�冈市国吉
2 調査期間	一九九九年(平11)五月～一〇月
3 発掘機関	(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
4 調査担当者	越前慎子・深堀 茜・町田賢一
5 遺跡の種類	集落跡
6 遺跡の年代	一四世紀～一六世紀
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要	

遺跡は富山県西部の高岡市にあり、西側を西山丘陵、東側を小矢部川に挟まれた氾濫平野に位置する。標高は約6mを測る。現況は

水田で、能越自動車道建設に先立ち調査を行なった。



調査の結果、上・下二面(いずれも中世)の文化層を検出した。主な遺構は、上層では桁行三間×梁間二間の掘立柱建物・上部が石組みで下部が曲物からなる井戸・竈のさく状遺構・土